
夜明けの魔術師

toto

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜明けの魔術師

【Zコード】

N91530

【作者名】

toto

【あらすじ】

はじまりは一通の手紙だった。

幼馴染の魔術師アキサリスに便乗して、一緒に王都を目指す村娘りん。けれどその道のりはどうも厳しい。

流血表現がありますが、ゆるいファンタジーになる予定ではあります。

春風が運んでくる、ヒトツachineryに花のかおり。

あつたかなおひをまとほかほか陽気。

ひとりたちのえずり、草木をゆらす風のおと。

平和だなあ。平和すぎて、あぐびがでかやつ。

つて、うとうとうてしそうになる体をひきしめて、わたしまつわ

そうと茂る縁の中へ足を踏み入れる。

おおきな森だった。

じつわこにどれくらいおおきこかは、じつはよく分かつてない。
でも、とてもなく広いってことは実感できていた。だつて、歩いても歩いてもずーっと縁が途切れないのだ。

すこく昔に、中央の国からおおきな軍隊がやつてきて、この森の広さを調べたことがあつたらしけど。一昼夜あけたあとに全員、森の入り口に戻つてきたらしき。誰も、森の向こう側をみないまま。ずっと北にむかつてまつすぐ進んでいたはずなのに、もとの場所に戻つてしまふなんておかしな話だつてみんな首を傾げた。そのときのえらい学者さんはいつた。うつそつとした森に惑わされて、方向感覚が狂つてしまつたんだろつて。

でも、不思議と、この森の向こう側を見たひとがいた話はだれも聞かない。

いつからか、この森には終わりがない、はでがないつてさせやかれるようになつた。

だから、こゝは、はでなしの森つて呼ばれてゐる。
べつに害があつたりするわけじゃないし、むしろぬぐみのほうが多いけど、立ち入るひとは少なかつた。やつぱり、氣味悪いんだろうな。

「アキちゃん。アキちゃん、どー?」

そんなとこに、好き好んで毎日のように足をはいぶひとがいる。
わたしの幼馴染のアキサリス。アキちゃんだ。

森に行くとたいてい、アキちゃんはお昼時になつても戻つてこない。だから、アキちゃんのお母さんに頼まれてわたしが迎えにいくはめになる。

別に森に入る」とに対して抵抗はないし、むしろ、ちょっとおちつくし好きな雰囲気だなとは思うけど、アキちゃんを探しにいくとわたしのお風じはんの時間が遅れる。そのことだけが不満だった。いちどアキちゃんにそう訴えると、鼻で笑われた。かわいくない。「アキちゃん、」ほんだよー。おなかすいたよー。飢え死にしかやうよー」

ぐうって空腹を訴えるおなかをわすって慰めながら、けなげにアキちゃんを探す。そうしてると、どこからかがさがさつて音がして、アキちゃんが現れた。もつと早く出てくれればいいのに。

「せっかく出てきいやつたの。なんだよ、ぶつさいくな顔しやがつて」

相変わらず、愛想のない態度だ。ただでさえ目つきが悪くて怖い顔なのに、薄氷のような目に剣呑な光が宿るとさらに凶悪になる。それでも、ぼさぼさの枯れ草色の髪をもうちょっと整えてくれたら、チンピラみたいな見た目も少しさはマシになると思つるだけだな。

「ふさいくつていつた！ひどい！」

「腹すいたくらいでぶーたれてるおまえが悪い」

ふくーって膨らませていたわたしの両頬を、アキちゃんは容赦なく手のひらでつぶした。痛い。おつきい手に挟まれたまま、くいつと上を向かせられるとアキちゃんの鋭い目がすぐ近くにあった。

「おなかすいた！」

「つるセー。耳元でキンキンわめくなよ。おり、帰るだ」

アキちゃんは口の中でちいさく言葉をつぶやいた。そのまま、おでことおでこをくつつけ、そこからわたしがぜんぶ、アキちゃんとおなじものになつてしまつたような奇妙な一体感。浮遊感。

その一瞬後、わたしたちはアキちゃんの家の裏手にある草原に降り立っていた。

「これ、魔法つていいからここ。」こんな風に、一瞬で場所を移動することができるなんて、つげづく便利だ。

わたしも使ってみたいけど、残念ながら、まつたく才能がなかつた。アキちゃんはお父さんが魔法使いで、才能もあるし環境もいい。凡人のわたしにとっては、なんだかうらやましい話だつた。

「こんな手段もつてるんだから、ぱぱっと時間どおりに帰ってきてよ。そしたらおばさんだってわざわざわたしを迎えにやるうなんて思わないよ。わたしはおなかすかないし、アキちゃんも邪魔がはいらないし、みんなしあわせだよ！」

「……。あそこにいると時間が分からなくなるんだよ」

「ふーん。そつかー。アキちゃんにも私の正確な腹時計を分けてあげたいなあ。便利だよ」

「いらねー」

アキちゃんはわたしをおしのけると、せつせと家に向かつて歩き出した。

昔はもひつむつとかわいかつたのになあ。いつからかすっかり無愛想な男の子になつちやつて、わたしは寂しい。

ゆううつになりかけていたわたしの鼻腔に、なんともいえない芳しい香りがすべりこんできた。「こはんだ。アキちゃんの家のこはんは、どびつきりおじしい。アキちゃんを迎えていたあとは、ここでおひるを」駄走になるのがわたしの幸せな日課だった。

「おばさんー。今日のおひるはなーに？」

アキちゃんの「しおりを追いかけて、家に飛び込めば、白いエプロンをつけたアキちゃんのお母さんができたてのスープをテーブルに並べているところだつた。

アキちゃんのお母さんはとつてもかわいい。

今日はアキちゃんと同じ枯れ草色の髪を後ろで束ねて、水色のワンピースの上から紺色のガウンを羽織るという上品な村娘風の格好

をしていた。「ほれおちやうなくりこおおきな藍色の瞳を細めて、微笑まれると、胸があわいと感じてしまつ。

「いつもお迎えありがとうね、リンちゃん。助かるわ。今日はね、なんと！鶏肉とおやさいたっぷりのポートフと焼きたてのふんわりパンよ」

「わーい！ いつただきまーす！」

アキちゃんの隣に遠慮なく座つて、ポートフとパンをほおばる。おいしい！

「生きててよかつたあ～って思える瞬間だー」

「おまえはお手軽でいいな」

「このときばかりは、アキちゃんの嫌味なんてぜんぜん気にならない。やっぱり、おいしいのはんつてすぐ偉大だ。

「はー。リンちゃん、牛乳も飲んでね。アキもちゃんと飲むのよ」「せうだよー。じゃないと、背、おつきにならないんだよ」

氣を悪くしたように、アキちゃんはぱいと横をむいてしまつた。背がちょっと低いことがアキちゃんの悩みの種らしい。乱暴でえらべつな態度のくせに、悩みが小さいなあ。

アキちゃんのこいついう弱みをいじるのも、わたしの楽しい口課だつた。アキちゃんよりチビなわたしがいつてもたいして堪えないだろ？

「……誰かくるな」

「んえ？」

アキちゃんは食事を中断して、玄関にむかった。玄関といつても、小さな家なので、食事をする居間と外は直接つながっている。

だから、ひょいと身体を傾ければすぐに外の様子は伺えた。

アキちゃんは訪問者と一、二言かわすとすぐに扉を閉じた。その手には上等そうな白い封筒に、仰々しい赤い蝶印がしてある。このあたりではまず使わなさそうなものだ。

「手紙屋さん？ めずらしーね」

「ああ。おやじ宛で、急ぎの用件いらして。おふくろ、おやじがいる

いるんだっけ

おばさんは家の外をまっすぐに指差した。

「外の書斎に引寄せもつてゐるわよ。届けてあげて」

「わかった

そう応えて、アキちゃんは出て行つた。

なんだか、家の中の空気が重い。氣のせいだらうか。
こころなしか、おばさんは怒つているようだつた。じつとわたし
が見つめていると、いつもどおりの笑顔を浮かべてくれたけど、な
んだか不安だ。

「わたし、帰つたほうがいい?」

「ううん。いてくれたほうが、いいかもしないわね
おばさんのその言葉は、いつそうわたしを不安にさせた。
なにか悪い報せなんだろうか。

おばさんは、なにか心当たりでもあるのだろうか。

アキちゃんが、アキちゃんのおとうさんを連れて戻つてくるまで
わたしは気が気じゃなかつた。

あ。もちろん、ポトフは残さず食べただけど。

樂園への招待

「王都つてとおいんだねえ」

「馬車でいけば、四~五日つてところだな。村から乗合馬車の駅まで丸一日かかる」

「そつかあ。なんだか旅行みたいでわくわくするねえ」

「……おまえは氣楽でうらやましいよ」

アキちゃんのお父さんの元に送られた手紙は、なんと、王都に住むえらいひとからの招待の手紙だつたらしい。おじさんつて、無口で静かだから、なにをやってるのか、なにを考えてるのかよく分からないなぞのひとだつたんだけど、王都ではとつても有名人なんだつて。

偏屈者でも有名だから、実力があつてもこんな風に召集されることは滅多にないんだつておばさんが言つていた。つまり、それだけ切迫したなにかがとおい王都では起こつてるんだろう。

けど、詳細なことはなにも書いてなかつたらしい。

おじさんは手紙に一度目を通してから、静かに言つた。

「アキサリス、ぼくの代わりに行つてくれるね」

頼み」とでも、ましてやお願ひでもない。おじさんの中での決定事項だ。アキちゃんはいやあーな顔をしたけど、しぶしぶといった感じで了承した。

おばさんはなにも言わなかつた。黙つて、アキちゃんの荷造りの世話を焼いていた。

旅装束に身を包んだアキちゃんは、さながら、夜盗のよつだつ。暗がりであつたら、ぜつたい悲鳴をあげてしまう感じだ。黒で統一された長袖と下ばき、羊の皮で作られたブーツにそろいの手袋。土色の麻布のマントを頭からすっぽりとかぶる形で身体にまきついている。うん、近づきたくない。目、怖いし。

簡素な服装の中で、目をひくのは赤い首飾りだった。いざものこ

ろにも首からさげているのをみたことがあるけど、ずっとつけていたのかな。赤くて丸い宝石を銀の鎖で通したシンプルな首飾り。お守りみたいなものなのかもしれない。

一方、わたしといえば。

紺色のフードつきの膝元まであるローブを着て、さらには上から同じ色のマントをまとっている。動きやすいように作業用のズボンをはいて、金属ちっくなあまり綺麗な色じゃない髪の毛は、うしろで束ねるだけにした。いちおう、旅だから、あまりかわいい格好はしていない。

「ところども、おまえ、疑問におもわねーの?」

「なにを?」

「王都に呼ばれたのはおやじ。でも、おやじは今、手が離せない用事があるから代理で俺が王都に向かうことになった。ここまではいいな」

「うん」

「で、なんでおまえもついてくることになつてることだ」「そう。アキちゃんの王都への旅路に、なんと、わたしも同行することになつたのだ。

「おばさんが、アキちゃんをひとりで王都に向かわせるのは不安だからだつて言ってたよーにわば、わたしは、アキちゃんの保護者になるのです」

「それでおまえは納得できるのか……そつか……」

アキちゃんは、複雑そうな顔でわたしをみつめた。言葉を飲み込んだつもりだろうけど、アキちゃんの口は雄弁に語つてくる。裏があるに決まつてゐるだらうが、なんでもつと考へようとしたんだ、と。

わたしだつて、疑問に思わなかつたわけではない。でも、わたしはアキちゃんのお母さんとお父さんを信用している。

両親のいないわたしを、娘のようにかわいがつてくれたひとたちだ。そんなひとたちを疑うなんてできなかつた。それに、アキちゃん

んをひとつで王都に送り出すのはやつぱり、わたし自身も心配だつたのだ。……なんていうと、ぜつたいアキちゃんはあきれるだうけど。

「なによう。その、かわいそーな子をみるよくな日は
「いや、俺がしつかりしないといけないと、改めて再認識していただけだ。……はあ」

「ため息…わたし、アキちゃんと王都まで旅行できるの楽しみにしてるのに」「は」

「そんな気軽じやねえんだよ。いつちば。せこぜこおとなしくして、足をひっぱるような真似はしてくれんなよ」

そう言られて、わたしはもちろん! とない胸をはつて言った。

だつて、村をおりて、山の乗合馬車の駅までいったら、あとはずーっと馬車旅なのだ。

なにも考える必要はない。がたがた揺られているだけで、自動的に王都につくのだから。

だといつのに。

わたしは、せつそく足をひっぱっていた。

「くらいいよー。さむいよー。アキちゃん、どー?」

日はすっかりおちて、あたりは冷え込んでいた。これが大地の上ならまだよかつたのだけど、石畳はひんやりとした冷氣を反射するだけでわたしをあつたかく包んではくれない。石造りの箱の中で、ゆいいつ外へと続く扉は鉄格子に覆われて、引いても押してもびくともしない。

閉じ込められたのだ。

ふもとの村を手指して、早朝、ふたりで故郷の村を離れて山をおりはじめたところまではよかつた。

太陽が真上にほどなく到達するころあいになつて、わたしの腹の虫がない。これら性のないわたしはアキちゃんに「はんをねだつた。渡されたのは乾パンだった。当然、わたしは抗議した。そこから喧嘩だ。旅立つてわざか数時間、わたしたちは喧嘩別れした。

ふもとの村に続く道は、ふたとおりあった。獸道と正規の道。悠久に整備された道をおりるアキちゃんに、あつかんべーと舌をだして、わたしは獸道を駆け下りた。

おもえば、それが間違いだったのだ。

気がつくと迷っていた。あるようでない、ないようである道を素人が渡るなんて無理があつたのだ。思わず、アキちゃんの名前を呼びそうになつたけど、我慢した。

とりあえず、下へ下へと降りていけば、ふもとにたどり着くだろう。不安を押し込めてそう結論付けると、わたしはとにかく足を動かした。

「うえ？」

なんの脈略もなく、首筋に衝撃がはしつた。そして、暗転。今に至る。

ほんと、ここ、どこだろ。村の近くの山の様子はある程度把握しているつもりだったけど、こんな石造りの人工物があるなんてしらなかつた。

冷え冷えとした空氣に、ぶるりと身が震える。マントを前でかき合わせて、鉄格子に近づいてみる。

「すみませーん。だれかいませんかー？」

返事はない。しんとした暗闇がただ広がつていた。

いま、何時くらいかな。わたしの腹時計は、ペコペコすがいで機能していられない。

アキちゃん、もうとっくにふもとの村についたかな。ひとりで、王都に向かう馬車に乗つてしまつたのかな。もう会えないのかな。ひとりで閉じ込められていると、いやなほつへいやなほつへ思考がむく。

とりあえず、いまはなんとかしてここから脱出しないこと。じつとしていても、事態がいい方向にむくとは思えなかつた。

「でも、どうしよう」

わたしは、アキちゃんみたいに魔法が使えない。それに、とくべ

つ力があるというわけでもない。もし、魔法が使えたなら一瞬でこんなところから抜け出せるし、力があれば鉄格子をやぶつて逃げることができる。

結局、じつして手をこまねくことしかできないのだと、痛感させられた。

才能ないからっていつて、おじさんの魔法のてほどきから逃げなかつたらよかつたな。力がないからっていつて、おばさんの護身術の教えを断らなければよかつたな。アキちゃんと、あんなことで喧嘩なんてしなきゃよかつたな。

なんだか、どうしようもない後悔ばかりが押し寄せってきた。

そのとき、ゆらりと空気が揺れた。煌々とした赤い光に闇が退けられる。同時に、かつん、かつんと闇を割るように、静かな足音が聞こえてきた。

凶暴な光に姿を暴かれて、わたしは目をつむつた。がちゃがちゃと鉄格子の鍵をあける音がする。誰だろう。怖い。身をすくめて、わたしはしゃがみこんだ。

触れたのは、おおきな男の人の手だった。無遠慮な手つきでわたしの腕をとると、無理やり立たせる。足にうまく力がはいらなかつた。ちらつと男の人の顔をうかがおうとしたけれど、男の人は顔中に包帯をまいていて、見えるのはぞろりとした不気味な目だけだった。

「歩け」

少ししゃがれた声。誰なんだろう。誰なんだろう。せんせんしらないひとだ。

男の人に導かれるまま、わたしは歩いた。細い石造りの通路だった。けつこうな距離を歩いたように思う。それとも、恐怖のあまり感覚がおかしくなっていたのかもしれない。

やがて、わたしの目の前に木で作られた扉が立ちはだかった。うしろを振り返ると、男の人があごで入れと促した。

扉のとつてに手をかける。なんとなく、あけたくないなと思つた。

開けたら、もう一度と光を拝むことができなくなる気がした。

ぐずぐずとするわたしに業を煮やしてか、いきなり男の人がそばにあつた金属製のバケツをおもいきり蹴つた。乱暴な音に心臓が縮んで、男の人から逃げるよう、「わたしは扉を開けて中に滑り込んだ。

目の前に広がる光景が、信じられなかつた。

無数のランタンが壁にかけられていた。部屋の広さはアキちゃんの家の居間くらいで、そんなに広くはない。石造りの腰掛が全部で三つおいてあつた。その腰掛のうちのふたつに、ふたりの少女が並んで座つている。

どちらもみたことのない少女だつた。年のこころは、わたしと同じくらい。本来は、いきいきとした瑞々しい輝きを放つてゐるであろう肌も、瞳も、なにもかもすべてが濁つっていた。

彼女たちの足元からまるく円を描くように広がる染みの色。まるで絵の具をぶちまけたような無造作さ。ランタンのあたたかい光に照らされて、異様な光景が広がつてゐた。

「なに、ここ」

ずつしりと胃のあたりが重くなつて、ほとんどなにも食べてないのに吐きそうになつた。うしろで、かちやりと音がした。わたしをここまで連れてきた男の人が、扉に鍵をかけたのだろう。

へたりこむわたしを、男の人が無理やり立たせる。そして、最後のパートをはめるように、わたしを石造りの腰掛の上に座らせた。

「いい夜だ」

頷けるわけがない。

「これで、世界は変わる。偽物は消えて、本物が残る。果たしてどちらが眞実なのか、君に見せられないのが残念だ」

流暢にしゃべつて、男の人は、真新しいナイフでわたしの頬をすうつとなでた。ぴりりと肌を裂く音がしたのに、痛みはなかつた。全身が麻痺したかのように、動けない。

わたし、殺されちゃうんだ。

じわりと恐怖がめじりから零れ落ちる。男の人は、まるで恋人をいつくしむかのように、優しい手つきでそれをぬぐってくれた。加虐者と被虐者の奇妙なバランスは、まるでこの男の人に愛されるのではないかという錯覚をわたしに与える。そんなのまやかしないのに。

「ばいばい」

ぎらりと、ナイフが凶暴な光を宿した。

田を瞑ることも、身体をよじつて逃げ出すこともできずに、わたしはただその切つ先をばかみたいに見つめていた。

風が吹いた。

どこにも、風が吹き込むような場所があるとは思えない小部屋の中で、とつぜん、風が巻き起こった。

次の瞬間、ふわりと土色のマントが私の田の前に広がった。

信じられない。アキちゃんだった。

アキちゃんは俊敏な動きで男の人のナイフを蹴り落とすと、わたしを荷物みたいに抱えて後ろに下がった。小さな部屋だから、あまり距離がとれるとは思えない。

男の人は動搖したようだつたが、すぐに気を持ち直したようだつた。腰からもう一本ナイフを引き抜くと、真正面から対峙する。「魔術師か。なぜ邪魔をする。もうすぐ、世界の真理がおとずれるというのに」

なめまわすように、男の人はアキちゃんを見据えた。そして、彼のどろりとした感情のない瞳に、はじめて、喜色が浮かんだ。

「その石は……はは、そうか。眞実はそこにあつたのか」

アキちゃんは顔をしかめてつぶやいた。地面におろしたわたしの手を握る手はわずかに震えていた。

「なにいつてんだ、このおっさん

「し、しらない」

アキちゃんの手をぎゅっと握り返して、わたしは泣きそうになりながら答えた。だつて、本当にわからないのだ。この男の人はいつも

たいなんなんだろう。急に流暢に話しかけたり、簡単に殺そうとしたり、喜んだり、わけがわからない。

ただひとつ分かるのは。きっと、わたし、この男の人とは一生分かり合えないってことだけだ。

男の人は、ゆっくりとわたしたちにじりよつてくる。アキちゃんとわたしがいるのは、この部屋の唯一の出入り口とは反対側だった。逃げ場所はない。どうしよう。アキちゃんの魔法で脱出はできないのかな。

ちらつとアキちゃんを見上げると、アキちゃんは首を振った。あまり、頻繁に使えるような魔法ではないらしい。すぐうしろには、無慈悲な石壁があった。絶望的だつた。

「若い魔術師よ、おまえは必ずたどり着く。偽りと嘘に塗り固められた偽物の楽園は」

男の人は、わたしとアキちゃんの両の前で立ち止まり、鋭いナイフを天高く振り上げる。

「おまえを殺すだらつ」

まるで、呪いの言葉だった。

アキちゃんは、わたしを守るように抱きしめてくれた。ぎゅっと目を瞑つてくるべきときを待つ。

「ごめんね、アキちゃん。わたしが間抜けなばっかりに。でも、来てくれてうれしかった。わたしばかり嬉しくてごめんね。ふたり一緒なら、死ぬのは怖くないかなあ。アキちゃんにはいい迷惑だつたよね。ごめんね。ごめんね。最後に、おばさんの焼いたアップルパイが食べたかったなあ。

散漫な意識が、けれど途絶えることはなかつた。

おそるおそる、目を開けてみると、男の人の口から、じょりと赤い塊があふれおちるのが見えた。

深々と、自分のど元にささつたナイフをいとしげになでて、彼はゆっくりと石造りの腰掛の上に崩れ落ちた。

展開についていけなくて、啞然としてしまう。なんで。

「あいつ、自分で自分の喉を刺しやがった……」

この異常な出来事を、わたしはうまく消化できる気がしなかつた。
そして、そんな時間も与えられなかつた。

男の人が崩れ落ちた、その数瞬後、この小さな部屋いつぱいに明るい閃光がひろがつた。無数のランタンの明かりも、夜の暗闇も簡単に飲み込んで、白い光に塗りつぶされる。

ねえ、アキちゃん。

わたしたち、これからどうなつてやうんだろう。

黒い影

「ううそ、ううと茂った森の中を、気の赴くままに散策する。木の葉を透かして照るあたたかな陽光と澄んだ空気がきもちいい。

この森はわたくしのお気に入りの場所だつた。内緒で を抜け出しては、よくひとりでこの空間を楽しんでいた。ここはわたくしだけの場所。わたくしじだけが許された場所なのだ。

おだやかな気持ちで大地を踏みしめていると、突如、大きな泣き声が神聖な空間を切り裂いた。

少し甲高く、あまたれたよつな、こどもの泣き声。

声の主を探して歩いてみると、すぐにつつに見つけることができた。ああ、かわいそうに。すっかり怯えて、に かけている。きっと の国のこどもなのだろう。このまま放つておいては に みまれて になつてしまひ。そくなつてしまえば、

することなどできない。

わたくしはこどもを両腕で抱きしめて、あやしてみせた。すこしずつ泣き声がおさまつていいく。かわいそつこ。このこを に す術などあるのだろうか。

ああ、そうだ。わたくしのこ 。これをこのに与えよ。これは に祝福された だ。ひとつこを守ってくれるだろう。ちじさくかよわいいとじょよ。安心なさい。わたくしがかならずおまえを してみせるから……。

「ううん…… からはず、やくそくするから……」

「リン！ 気がついたのか」

なんだか、背中が痛い。いや、全身が痛くて頭も重くて、気分もわるい。もうちょっとこのまま眠つていいなあ。

「おい、寝るんじゃない。起きろよ」

しかし、容赦なく肩をつかまれ、がくがくと前後に揺りられる。なにがなんでも起こすつもりらしい。

「アキちゃん……ひどいよ……」

「なにがひどいもんか。こつまで経っても起きないおまえのほうがひどい」

うつすらと開けた視界に、最初にうつったのはアキちゃんの凶悪な顔だった。目を眇めて、じめじめと睨みつけてくる。ほんきで怒ってるらしい。

ずきずきと痛む頭を押さえながら、わたしはゆっくつと起き上がりつた。

「今日つてなんかだいじなやくべくでもあつたつけ、寝坊して」「ぬんね。だから怒つてるの?」

「は? なに寝ぼけてんの。しつかりしろよ」

アキちゃんにうづばねられて、わたしはすこしだけ冷静になつて考えた。

しめつけに十のこおり、縁のじゅうたん、光をさえぎるよつて生い茂る木々。はつぱの隙間からわずかにたす太陽のあかり。頬をなでる風はひんやりとしていて、澄んでいる。正確な時刻はわからなければ、朝なのだろう。ことりたちのさえずりがときおり耳を打つ。

ここつて、山だ。

それもおそらく、わたしがアキちゃんとばぐれた山。

「あー」

そうだ。わたし、へんな場所につれこまれて、へんなおとのひとに捕まつたんだ。

おとのひとの首に深々と突き刺さったナイフ。異常な光景に慄いているひまもなく、とつぜん現れた光に飲み込まれて……。

そこから、なにも記憶がない。

もしかして、あのへんな場所から、気を失ったわたしをアキちゃんが連れ出してくれたんだろうか。

「俺も気がついたらここにいた。おまえとまったく同じ状況だよ」「まさか夢……だつたなんてことはないだろ？　だって、アキちゃんも覚えてるんだもん。あれはたしかに現実にあつた出来事なのだ。そう思いたくはないけど。

なんだかすつきりしないまま、わたしたちは再び王都を田指すこととした。

立ち止まっていても仕方がないし、積極的に関わりあいになりたくなかったというのも大きな理由だつた。

もくもくと下山して、ふもとの村にたどりついたのは、ちょうどお昼をまわった頃だつた。

「だーれもいないねえ」

村の地名が表記された看板の前をとおつて、動物よけかなにかの木の柵をまたいで、ぽつぽつと建てられた民家の傍までやってきた。が、ここにたどり着くまで、村人の姿を誰一人としてみることはなかつた。

お昼時だから、みんな家でごはんでも食べてるんだろうか。

そう思つて周りを見てみると、どの民家からもかまどの煙は出ていないし、空腹を誘うよい匂いもしてこない。

「いくらど田舎の村だからって、誰もいないなんてことはまずないはずだ」

アキちゃんは小さな民家を片つ端からノックした。けれど、どの民家からも返事はなかつた。

村には、不気味な静けさが漂つている。

本来ひどがいるべき場所に、ひどがいない。それを意識すると、急に、この村がなにかとてつもなくおそろしい場所に思えた。

臆病風に吹かれたわたしはアキちゃんにおいていかれないよ、必死に彼のあとを追つた。

そして、わたしたちが最後に訪ねたのは少し高い丘の上にある大きな民家だった。木の盾を意匠にした紋章がドアノブに刻まれている。

「この村の村長の家だらうか。

アキちゃんが扉をノックする。一回、二回、三回。何度もノックを繰り返すが、返事はない。

やはり、この村には誰もいないのだ。

じんわりとした恐怖が足元に這いよつてくる。一刻も早く、この村を離れたほうがいいんじゃないだろうか。なにかがおかしい。

「ねえ、アキちゃん……」

はやく村を出て、乗合馬車に乗る。

そう声をかけようとしたときには、アキちゃんはもう姿を消していた。

村長宅の扉が開いている。勝手に中に入ってしまったたらしい。このまま外にひとりで待つているのも怖くて、わたしもあわてて中にはいった。

玄関をくぐると、まず客間があつた。その奥にはキッチンがあつて、食事をとる大きなテーブルがある。椅子はぜんぶで四脚あつた。四人家族なのかな。怖さを少しでもまさぐらわせるために、どうでもいいことを考える。

アキちゃんはキッチンにいた。堂々と食べものを物色している。「な、なにしてるの、アキちゃん。誰かが帰つてくる前にはやくでようよ」

「どれも腐つてゐるな。荒れちゃいないが、テーブルも床もほこりが積もつてゐるし、この家の住人はそうとう長い間留守にしているらしい

「そんなことどいつもいよい。ねえ、はやく乗合馬車に乗るといいにこいよ」

アキちゃんの腕をひっぱつて、ひきずるようにして民家を出る。

民家を出たところで、胸をほつとなでおろす。この村に対しても感じた氣味悪さは変わらないが、他人の家に十足で踏み入る後ろめたさからは解放されたからだ。アキちゃんつてけっこつ図太い。

「この村、へんだよ。はやく外にこいよ」

「あんまり引っ張るんじゃねーよ。それに急ぐな。転ぶぞ」

とにかく一刻も早くこの場を離れたかった。嫌がるアキちゃんをぐいぐい引っ張つて、木の柵を乗り越えて村を出る。小石が敷き詰められた街道と思しき道をずんずん進み、村が見えなくなつたところでやつとひと安心できた。

はー。なんだつたんだろう、さつきの村。誰もいないなんてぜつたいおかしい。すごく嫌な感じがした。

わたしは山を降りたことがないから、ふもとの村を訪れたのははじめてのことだつたけど、アキちゃんはどうだつたんだろう。

一步前を歩くアキちゃんに、なんとはなしに聞いてみた。

「アキちゃん、あの村つていつもああの？」

「そんなわけないだろ。あれは異常だ。集団でどこか他の場所に移動したにしろ、緊急的で突発的ななかがあの村を襲つたのは確かだな」

「そつか。なにもしらなかつた」

「俺達の住んでいた森は、正確な意味で隔絶されてるからな……」

そこでふと、アキちゃんは考えるそぶりを見せた。ああ、これはよくない兆候だ。アキちゃんはいちどなにかを考え始めるとまわりが見えなくなるのか、話しかけてもなにをしてもかまつてくれなくなる。

その予感は的中で、思考の海に沈んだアキちゃんは、わたしがいくら話しかけてもなんの返事もしてくれなくなつた。

ただもくもくと、乗合馬車乗り場を目指して街道を歩く。

太陽はすぐに西にむかつて沈んで、あたりは飴色に染まっていく。だいぶ歩いた気がするけれど、誰ともすれ違わない。まるで世界には、アキちゃんとわたしふたりっきりみたいだつた。

わたしたち以外の誰かがない。ふだんは意識しない他人という存在をこんなにも心待ちにするのは、はじめてのことだつた。

わたしがこんなにも不安がるのは、きっとあのへんな男のひとのせいだつた。わたしたちではない誰かの死を見せつけられて、わた

したち以外の誰かの存在をこんなにも確かめたがらせている。

「……ついたみたいだな」

いつの間にか、思考の海から浮上したアキちゃんが言った。

彼の言葉につられて前方を見てみると、たしかに街道の近くに小屋のようなものが建っている。

あれが乗り合い場なんだろうか。自然と足が速まる。あたりは既に夜の気配に包まれていた。完全に夜になる前に目的地につけたのは幸運だった。

「疲れたねえ。でもうれしいな。馬車でいく樂ちんな旅だね！」

「さすがに今から乗車できる馬車はないだろうが、野宿はせずにすみそうだ」

「こころなしか、アキちゃんの声も弾んでいた。

しかし、小屋に近づくにつれて、その仔細がわかると、わたしたちは落胆せざるをえなかつた。なぜなら、あたりが暗くなりはじめているといふのに、その小屋にはなんの灯りもともつていなかつたからだ。

小屋の扉には、木で作られた白塗りの看板が掛かっていた。『乗り合い場』と彫られた文字の下には『休業中』の文字。つまり、ここはかつては乗り合い場であつたけれども、いま現在はそうではないということだ。

アキちゃんは小屋の扉に手をかけて、何度も前後に揺さぶつた。鍵が掛かっているらしい。

軽く舌打ちすると、アキちゃんは腰に下げた袋から針金を取り出して錠前に突き刺した。地面に片膝をつき、扉に耳をあてて探るよう繊細な手つきで針金を動かす。

「アキちゃん……それって……」

「つるせー。いま大事なとこだから黙つてろ」

まさかの、本日一度目の不法侵入。

アキちゃんは見事に、針金一本で小屋の扉を開けてみせた。同時に、かび臭いこもつた空気がむうっと漂つてくる。

「なにしてんだ、さつさと入れよ」

「け、けど……」

「きたねえけど野宿よりはマシだる。外で寝たいつていうなら、止めないけど」

少し意地悪な言い方で、アキちゃんはわたしの腕をとり、小屋の中に引っ張り込む。

薄暗い小屋の中を見回すと、案外広いことが分かった。

扉からそう遠くないとこに、カウンターがある。おそらくここが乗合馬車の受付だつたんだろう。待合室らしきところには大きなソファがふたつ並んであつて、その向こう側には大きな戸棚がひとつあつた。

待合室の中央には、青銅で作られたランプがひとつ吊るされている。アキちゃんは戸棚からランプの油を拝借して、ランプに火をつけた。ほっとするような、橙色の炎が夕闇に揺らめく。

「誤算だつたな……まさか乗合馬車が使えないとは思つてなかつた」アキちゃんはひとりごとのように呟いて、ソファの上に腰を下ろした。わたしもならつてアキちゃんの隣に座ると、半眼で睨みつけられた。

「ソファならあつちにもあるだろ」

その指摘は「もつともだつたので、すじすじ」と向かい側のソファに移動する。紅色の布で覆われたソファはほこりつぼかつたが、すわり心地はいい。勝手に無人の小屋を借りることに対しても抵抗があつたが、背に腹は変えられない。せめてあまり汚さないようにしようと決意した。

「ほら、食えよ。それが今日の晩めし」

アキちゃんが放つてよこしてきたのは乾パンたつたの3枚きりだった。

「これつぱつち？」

「馬車が使えないんじゃ、この先どうなるのか分かんねー。食料が手に入る田処が経つまでは節約しねえと」

育ちざかりの身としては、これはつらい。ついめしげなわたしの気配が分かつたのか、アキちゃんは嫌そうに眉をひそめた。

「もともとふもとの村で食料とか本格的に揃える予定だつたんだ。おまえは変なのに捕まるし、村は無人だし、馬車は使えないしで予定は狂いつぱなしだ。そもそも、おまえがついてくること自体、予定外なんだけど」

「それも人生をたのしくするためのスペイスだよ、きっと」「いられー。全力でいられー」

ふたりで向かい合つて、ちまちまと晩御飯……といえるかは微妙だけど、泣き声をあげるお腹を慰めた。

ブーツを脱いで、歩きつぱなしで疲れた足をソファの上に投げ出す。お風呂なんてぜいたくなことは言わないけど、せめて体が拭けたらなあ。水場の近くに寄ることがあつたらアキちゃんにお願いしてみよう。

閉じられた空間と、人の手による灯りによつてすっかり寛いでしまっているわたしとは正反対に、アキちゃんは熱心に戸棚をあさつていた。

食事を終えたら一気に疲労が襲つてきてしまつて、そんなアキちゃんを咎める元気はなかつた。そもそも、この場所で寛いでしまつている時点で、わたしにそんな権利はないなんだけれども。

「アキちゃん、なにしてるのー？」

「地図を探してるんだ。おおまかなものしか持ち合わせがないから、もつとこの辺りについて詳しい地図がほしい。……おまえも手伝えよ、ばかリン」

べしつとわたしの頭を叩いて、アキちゃんが睨んでくる。そんなに怒つてばかりで疲れないのかなあ、アキちゃん。

そんな風に、のんきに過ぐしているときだつた。

とつぜん、谷底から聞こえる獣のような叫び声が空気を切り裂いた。慌てて飛び起きたわたしはソファから転げおり、アキちゃんは周囲をうかがうように身構えた。

今日は厄日だ。今度はなにが起こっているんだろう。

窓の外を見てみると、もう完全に夜のどばりはおち、真っ暗になつていた。

「リン、窓に近づくな

そういうわれて、わたしはアキちゃんの傍に走った。

戸棚を背にして、アキちゃんは窓と扉に注意を払っている。もしも、仮に、何者かがわたしたちに危害を加えようと進入してくるなら、まずそこだった。

「あ、あかり、消したほうがいいかな……」

「……そう、だな」

アキちゃんの返答は歯切れが悪いものだった。

灯りを消すことにためらいがあるらしい。たしかに、外はまつくりだし、視界が限られるのはあまりよいことには思えない。けれど、灯りがついているということは、そこににんげんがいるということが相手にわかつてしまふということだ。

さきほどの声の主が灯りのある意味を理解するかはわからないが、灯り自体がなんらかの目印になつてしまふことは確かだった。

そもそも、わたしたちを害する意思があるのか、ないのかも、わからぬけれど。

再び、獣めいた叫び声が、今度は一度続けて聞こえた。最初に聞いた声よりも大きく、なにより、思つていたよりも近い！

どくんどくんと耳の奥で心臓の音が響く。でのひらはいやな汗をかいている。アキちゃんの服の裾をつかもうと伸ばした手は、邪魔だとばかりにはねのけられた。行き場を失つた手を胸の前で組み、わたしも耳をします。

なに食わぬ顔で、見知らぬ何かはとおりすぐれただろうか。
それとも。

「あ、アキ……」

「だまつてろ」

どすんっと、小屋全体が揺れた。

大きく体が傾きかけ、あわてて戸棚にすがりつく。からつじて転倒はまぬがれた。

顔をあげると、ほの暗い室内に、きらりと銀色の輝きが弧を描くのがみえた。腰元に隠していたナイフをアキちゃんがかまえたのだ。なにか、くる！

そう思つたのが先か、そのなにかが到達したのが先か、正確などいろはわからない。

目の前で、黒い影のようなものとアキちゃんがもつれ合つように床に転がった。ランプの灯りに照らされて、黒い何かは姿を現す。その何かに陰影はなく、ただただ異様で、黒一色の、生き物と呼ぶことを躊躇わせる存在だった。

「うならば、これは、影そのものだ。

けれど、わたしたちの「しろを無邪氣についてまわるかわいらしいものではない。もつと、なにか、まがまがしいものに思えた。

「あ、アキちゃん！」

黒い影が咆哮をあげる。びりびりと空気が震え、窓ガラスががしゃんっと割れる音が聞こえた。まるで、その圧倒的な力をわたしたちにみせつけるみたいに、影は大きくしなった。

アキちゃんは影の下敷きになってしまっていた。どうしよう。いまはかるうじて右半身が見えていた状態だけれど、いざれぜんぶ飲み込まれてしまいそうだ。

わたしはとっさに戸棚を開けて、中に入っているものを黒い影に向かつて投げつけた。

お皿やコップ、スプーンといった食器類がつぎつぎと無残な姿で床に散らばる。黒い影はまったく堪えた様子もなく、まるで食事でもするかのように、じわりじわりとアキちゃんの姿を隠していくてしまう。

「うーー！」

こんなところでアキちゃんを失うわけにはいかない。

そう思うのに、いつたいどうすればアキちゃんを助けることがで

れるのが、ぜんぜんわからない。悔しい。こんなことなら、アキちゃんと一緒に魔法を翻つておけばよかった。つい最近、同じような後悔をしたばかりだというのに。

そうだ。アキちゃんは、助けてくれたんだ。それなのに、どうしてわたしはアキちゃんの助けになれないんだろう。

「どうかいきなさいー！こにはおいしいものなんてなにもないよー！」わたしは黒い影にむかって体当たりをした。なんども、なんども、なんども！

けれど、影はびくともしない。

それどころか、わたしをもつかまえようとその体を伸ばしてきた。大きな黒い影が、しりもちをついて座り込むわたしにむかって覆いかぶさる。逃げ場はない。そのまま、しんどしそうだらうか。

そのとき、影がまっ�たつに割れた。

上下に分断された黒い影は、あっけなく溶けるように消えてしまつた。一瞬だつた。

「へ……？」

いつたいなにが起つたのだろう。

いや、それよりなにより、アキちゃんは無事なんだらうか。わたしは床に倒れているアキちゃんに駆け寄る。立ち上がるが、すぐにへたりこんでしまつた。足が震えていつことを利用かない。なんどこう役立たずな足なんだ。

「おや、生きてるね。君達は実に運がいい」

場違いな、なんとも明るい声だつた。

声の主はアキちゃんの頭を靴で軽くこづぐ。すると、ちこせなづめき声がした。ああ、よかつた。アキちゃんは生きてこる。

ほつとするのもつかの間、声の主はわたしの田の田の前までやつてきた。床にすわりこんだわたしは、声の主を仰ぎみる。

まだ若い、おとのひとだった。細身の長身で、長めの金の髪をうしろで括つてこる。少し切れ長の田は、まるで夏の青空のよう

澄んだ色をしていた。服装は至って簡素で、あら染めをした麻の服の上から藍色のマントを羽織っている。そしてその左手には、長く鋭い銀色の片刃の剣が握られていた。

じつと見つめていると、急におとこのひとは破顔した。

「なんだ。まだこどもか、残念。そつちの坊主、手当してやるから運ぶの手伝ってくれるかい？」

まったく汚れのない長剣を鞘にしまって、アキちゃんのからだを動かそうとするおとこのひとの姿を見て、はじめて、助けられたのだとわたしは実感した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9153o/>

夜明けの魔術師

2011年7月24日03時19分発行